

趣意書 特別名勝・松島の町興し 「紅蓮禪尼供養・島巡り観月灯籠流し」

虎哉禅師が著した『松島方丈記』以来、藩政時代の松島は「日本が誇る天下第一の景勝地」として、数々の史書に記されてきました。近年の「日本三景」発信に加え、松島の「町興し」には、「何故、松島が日本一の魅力的な景勝地として伝えられて来たのか」を大切に据えるべきと考えています。歴史的には、平安末期『撰集抄』に記された「雄島の“月まつしまの聖と西行上人”の説話」から連綿と伝えられてきた観月文化に注目して頂きたいのです。

平安貴族から和歌に詠まれた松島の月は、言葉に尽くせないほどの風雅を保ってきました。

月明かりの松島が日本庭園の歴史（作庭史）上、理想的な庭園（寂光浄土）と慕われました。

仙台藩祖・政宗公が、湾内の要に亀ヶ崎の月見御殿【後の観瀾亭】を配した安土桃山様式の建築群は白砂青松の磯に見事な調和を成し、日本一の風情が結集されました。こうして全国諸藩の大名は、塩竈・松島（千賀の浦・雄島が磯）をモデルとした日本庭園を作庭したと伝えられています。

（京都市桂離宮、枳殻園、醍醐寺・三宝院などの池泉船遊式庭園）

松島の最大行事は、伊達家・菩提寺の瑞巖寺による盂蘭盆会御施餓鬼、「松島灯籠流し」です。そもそも「お盆の十六夜は、月夜が大変綺麗で、納涼を兼ねた先祖供養の行事であり、古来より我が国の民俗行事が月明かりのお陰で安心して夜間外出できた慣習にある」と思われます

各月に関わる松島の歴史的文化行事を紹介してみましょう。

三月十五夜・・・徳治二年（1306）、頼賢の碑【国指定重要文化財】建立の日。

七月十六夜・・・瑞巖寺御施餓鬼、「松島灯籠流し」、念仏踊り。

八月十三夜・・・心月庵紅蓮禪尼の命日。

八月十五夜・・・伊達政宗公による瑞巖寺【国宝】の縄張り、仙台藩の月見行事。

九月十三夜・・・仙台藩の月見行事。

十二月十五夜・・・政宗公による五大堂【国指定重要文化財】落成の日。

郷土史ボランティア「おくの細道松島海道」は、2000年から「松島を日本一の景勝地と絶賛した」史書の中から、「芭蕉の道を辿り、往時を偲ぶ集い」を毎年継続し、松島の観月文化を発信しています。さらにこの輪を広げようと、松島島巡り観光船（企）の同意を得て、「心月庵紅蓮禪尼供養の島巡り観月灯籠流し」を2年前より継続しています。宮城県より「観光王国おもてなし」奨励賞を2年連続頂いております。今回の灯籠流しは3年目を迎えますので、早稲田大学「卯月ゼミ」の皆さんや地域のボランティア・ガイドとともに、「日本一と慕われた松島の月」を町興しの柱とし、微力ながらも「日本一に相応しい松島のおもてなし」を目指し、毎年灯籠流しを継続したいのです。この趣旨に賛同の有志・スタッフを募りますので、ご理解・ご協力を心からお願い申し上げます。

以上

平成28年7月吉日

発起人	おくの細道松島海道	代 表	京 野 英 一
協 賛	株式会社 松島こうれん	代表取締役	星 稔
	松島島巡り観光船企業組合	理 事 長	大 山 弘
	株式会社 むとう屋	代表取締役	佐々木 繁ほか
	別紙団体【瑞巖寺、円通院、天麟院、伊達政宗歴史館ほか】		

後 援	松 島 町、	一般社団法人松 島 観 光 協 会、
	み や ぎ 街 道 交 流 会	
協 力	早稲田 大学 教授	卯 月 盛 夫
	宮 城 大 学 教授	鈴 木 康 夫

企画書：「紅蓮禪尼供養、島巡り観月灯籠流し」－第 18 回「芭蕉の道を辿り往時を偲ぶ集い」－

開催日：平成 28 年・陽暦の 9 月 17 日（土）（中秋の名月・八月十五夜）

主 催： おくの細道松島海道 共 催：早稲田大学卯月ゼミナール松島班

● 心月庵紅蓮禪尼供養と島巡り観月灯籠流し（108 個限定）

今年は、心月庵紅蓮禪尼の命日・嘉暦四年（1329）八月十三夜にちなみ、9 月 17 日（土）が中秋の名月（八月十五夜）に行います。（小雨決行）



松島伝統の灯籠流し・百八個（108）の復活
財団法人・斎藤報恩会所蔵「陸奥国名所絵図」

「佐久間晴岳の松島燈籠の画」参照
—観瀾亭からみる灯籠流し—

開催目的：松島観光リピーターの創造を図りながら、「扶桑第一の松島」を発信できる人材育成を目指します。【河北新報・2010-2-25「持論時論」記事：東北の観光振興—長期的な視点で戦略性の高い観光資源発掘に力を入れるべきである】参照

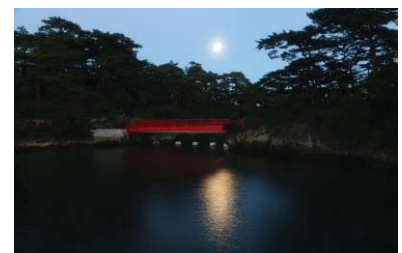
「松島灯籠流しの由来」：『仙台事物起源考』（元宮城県図書館長・菊池勝之助著）に記載されています。一部抜粋：「奈良時代の天平年間（729-747）に中国から伝えられたものを、瑞巖寺が円福寺と称した頃に松島に伝わったものであるという。…しばらく途絶えていたが、瑞巖寺 110 世曹源祖水が文化八年（1811）頃から 108 個の灯籠を流し、再興され伝えられている」。



観瀾亭・月見崎の名月



瑞巖寺総門に昇る月



雄島・渡月橋の月



福浦島の灯籠と満月



西行戻しの松を照らす名月



大高森を照らす残月

■ 月の暦は太陽暦では解りにくく、閏月もあり陰暦による 1 か月をほぼ 29 日と換算して出来ています。

（「松島の月撮影」： 京野英一 malkyo@wave.plala.or.jp 無断での画像転載はご遠慮下さい。）

紅蓮禪尼供養 松島三霊廟参拝・島巡り観月灯籠流し



9月17日(土)

- 14時 集合・受付
JR松島海岸駅前出発
- 研修参加費

5,000円(先着80名限定)

入館料、乗船券、灯籠、夕食・飲物、資料代:

- 19:30 観光棧橋解散
- 8月17日 募集開始



松島の芭蕉宿・久之助主の熱田屋(大垣市所蔵)

島
巡
り

籠

灯

観

月

流

し

■ 芭蕉翁の憧れた月まつしま



観瀾亭からの松島灯籠 「御領内名所図会」

天保年間の佐久間晴岳作 斎藤報恩館所蔵

紅蓮禪尼供養と松島三霊廟『おくの細道』松島紀行

象潟と松島は紅蓮禪尼が縁で「夫婦町」になっており、八月十三夜が命日です。

又、八月十五夜は、政宗公が自ら瑞巖寺の縄張りをした日です。

湾内の観月船から108の灯籠を流し、多くの故人を偲び、供養いたします。

■ 主催 おくの細道松島海道 ● 問合先 090-8923-1271(京野)

■ 共催 早稲田大学・卯月ゼミナール

■ 後援 松島町、(一社)松島観光協会、みやぎ街道交流会 ■ 協賛 松島島巡り観光船(企)
(順不同) (株)紅蓮屋、瑞巖寺、円通院、天麟院、松吟庵、(有)松華堂、(株)むとう屋、割烹 中央、たいかん亭
(株)松島蒲鉾本舗、伊達政宗歴史館、ホテル大松荘、ホテル絶景の館、小松館 好風亭、さんとり茶屋ほか



政宗公が瑞巖寺縄張りした八月十五夜の月

松島三霊廟巡りと『おくの細道』松島紀行

—第18回 芭蕉の道を辿り、往時をしのぶ集い— 八月十五夜編

申込方法 8月17日より研修参加者の募集開始（先着80名限定）

開催日 平成28年9月17日(土) 【小雨決行 午後14時開始】
JR松島海岸駅集合

申込先 malkyo@wave.plala.or.jp 京野英一宛
(E-mail) 090-8923-1271

研修参加費 5,000円（入館料すべて実費込み）

入館料、観月乗船券、ミニ法要膳、灯籠代、飲物、資料代含む

振込先 ゆうちょ銀行(郵貯) 18100-35139541
おくの細道松島海道宛

準備都合上、9月1日以降のキャンセルはご容赦下さい。
後日、テキスト資料の発送にて代えさせていただきます。

参加申込書

〒

(お名前)

(ご住所)

(電話番号)

象潟・蚶満寺の紅蓮禅尼供養碑



紅蓮禪尼供養島巡り観月灯籠流し

駅前 14:00受付

JR松島海岸駅

14:15出発

(松島海岸駅仙台行 20:12発)

14:30着

瑞巖寺・本堂

宝物館

島
灯
巡
り
観
月
流
し
— 船内ミニ法要膳 —

陽徳院・宝華殿

政宗公
正室・愛姫

15:30発

15:45着

円通院・三慧殿

忠宗公
嫡子・光宗

16:15発

比翼塚・紅蓮墓参り 蜂屋小太郎

円通院経由

天麟院・定照殿

政宗公・長女
五郎八姫

16:50発

トイレ休憩

17:00着

雄島散策

座禅堂
松吟庵
芭蕉句碑

17:40発

(月の出鑑賞)

17:50着

松島観光棧橋

18:00出航

18:10 月の出

松島観光棧橋

19:30下船後 解散

資料下:円通院前の比翼塚に移された紅蓮墓碑



東日本大震災被災者供養

●写真画像は、瑞巖寺、円通院、天麟院より掲載許可申請済みですが、宝華殿は現在非公開中です。

瑞巖寺 灯籠流しの由来

おくの細道松島海道 京野 英一

奥州松島の瑞巖寺において、毎年七月一五日（陰曆）即ち、中元に海岸で莊嚴に行われて来た流灯会と施餓鬼とは、その起源は古く、地方寺院の年中行事で中有名なもので盆風俗の一つである。

瑞巖寺の記録によると、藩政時代から現在まで一定して変わらない行事として伝わってきたものは、松島海岸の水陸会と流灯会とがある。

毎年中元の翌日（旧盆の十六日）に行われた。

この水陸会の始めは奈良時代の天平年間（729-47）に中国から伝えられたものを、今より○百余年程前（鎌倉時代）円福寺と称した頃に伝わったものであるという。

そして、このお施餓鬼の時に行われる流灯会も松島に関する記録によれば、大体同時に行われたようである。

この行事も中頃しばらく絶えていたが、瑞巖寺百十世の住僧・曹源祖水が、随身の性薫雲英の発願により、文化八年（一八一二）頃から再興されて今日に及んでいる。「松島の灯籠流し」と呼んでいるのがこれである。

「松島の灯籠流し」に関して、国学者・久保田光則はその著書『新撰陸奥風土記』において次のように述べている。

「松島の灯籠流し並びに念仏踊り、七月一六日の夜此事あり、孟蘭盆の送り火、百八の灯籠を流し、狐月雁嶺に傾き、西風に落ちて灯火しばらく経ヶ島の岸に漂う。一点の灯火かすかなれども、奥海十方を照らす。其の光景や、風に追わるるもあれば追うものあり。消

えるもあり、もゆるもあり。相寄りてうなずくもあり、独り流れて遙かの汐路に趣くあり、帰るあり、行くあり、座するがごときあり、各幽明潮に映じて相親しみ言語を交わるが如きも、たちまち風に消されて魅よばひせん便りさいなく再烟に立ち帰る。（中略）」。

「其初瑞巖寺の曹源和尚に侍りし雲英といへる僧の始めしことにて、十六日衆僧瑞巖寺の前海へ出て、靈座を設けて経文をはじめ誦し、灯籠を此方の岸より流し、経ヶ島に至らしむ。もし風沖より吹くときは経ヶ島べに舟にて持ちいき、あなたより流してこなたに至らしむ。

念仏踊りは雲居念仏ともいう。孟蘭盆会の頃雲居国師の百八の歌を老若男女声おもしろく謡いつれ（中略）幾群となく踊り来る人の米錢を渡島に納めて親族不離の亡霊に供養す。」

以上のように、始めは灯籠の数も百八個で、場所も瑞巖寺大門の直前から流して、経ヶ島までとしたようであった。そして海岸では素朴な盆踊りなどがあったのが、後になって花火や手踊りなどが加えられて今日に及んでいるのである。

出典 『仙台事物起源考』一九九五年発行 菊池勝之助篇

二五〇 松島灯籠流しの由来 より